「捨ててこそ～受けとれる世界」

●自分が見えると

　ある政令指定都市の「地下鉄のホームに鏡を設置」したところ、飛び込み自殺者が減ったと本に書いてありました。見えていなかった自分の姿に注意が向いて、見えるようになると、自分の行いそのものを見つめるようになるということでしょうか。
　ずいぶん前に、龍谷大学の先生から聞いた話です。日本の自殺の研究報告書に、大変興味深い記載があったそうです。
　断崖絶壁から海に飛び降り、自殺をしようとした人が崖っぷちに立とうとすると、足元の土が崩れて、思わず、近くの木にしがみついて呟(つぶや)いたそうです。
「ああ、危なかった!」
　冗談みたいですが、私たちも同じようなものを抱え、しがみついていないでしょうか。

●「自己への気づき」

　先の本は、『ケーキの切れない非行少年たち』（宮口幸治著、新潮新書、2019年）です。
　この本によれば、非行に至る少年たちは、認知力が不足しているにもかかわらず、それが社会の私たちに理解されていないことも、大きな問題だと提起しています。
　ある意味で、社会の中で非行少年の行動が生まれる背景を分かりやすく示す啓発書ともいえるので、読んでいて教えられるところが多々あります。
「非行少年から学ぶ子どもの教育」の章には、「大きく変わり始める（非行）少年たち」、その「〝彼らが変わろうと思ったきっかけは何か?〟を知ることは、学校教育へのヒントにもなる」と示されます。
　要約すると「きっかけ」とは「自己への気づき」であり、それが、今までになかった「自己評価の向上」につながると論証しています。
「自分の不適切なところ」を改善するには、「適切な自己評価」が原点で、悪いことをしてしまう「現実の自分に気づくこと」により、「自己洞察」、そして「葛藤」を持つことが必要とあります。

●捨てる～選ぶ

　法然聖人（1133～1212）の『選択(せんじゃく)　本願念仏集』は、題名通り、念仏を選ぶことを勧め、念仏以外の様々な道を選びすてることが説かれます。これは、中国の唐の時代、善導大師(ぜんどうだいし)が念仏一行を選びとるという仏道を主張されたものに基づくものです。
　平安時代中期の空也(くうや)上人（903～973）は、若くして出家され諸国を行脚しましたが、京都に移り乞食(こつじき)し、鉦(かね)を打ちならし人びとに念仏を勧めました。
　当時、比叡山延暦寺の別院、三井寺に、千観(せんかん)（918～983）という高僧がいました。宮中のお内仏に奉仕する内供(ないぐ)という高い地位にありましたがある日、宮中から立派な輿(こし)に乗って三井寺への帰路、四条河原で、鉦を叩き、高声念仏して歩む、弊衣(へいい)の空也と邂逅(かいこう)します。
　千観は輿から降りて、空也が来るのを待つと、そこで跪(ひざまず)き、私は念仏を日ごろ学んでいるがその極意が分からないと尋ねます。空也は、私の方こそ貴方のような高僧に学ばなければならないのに、教えるようなことはありませんと答え去ろうとします。その袖をつかみ、迫る千観に向かって空也は「いかにも身を捨ててこそ」と言うと袖を振り払い、念仏を称えつつ足早に去りました。
　千観は立ちつくし、河原で衣を脱ぎ、供の者に自分は三井寺にはもう帰らない、この衣と袈裟を持って帰ってほしいと言うと独り西に進み、箕面(みのお)という所で庵(いおり)を結び、身を隠し、旅人の荷物を運ぶことで生計を立て、『極楽国弥陀和讃(ごくらくこくみだわさん)』という格調の高い讃歌を残しました。鴨長明の『発心集(ほっしんしゅう)』にある話です。
　自分の姿に気づき、より所にならない「不適切」なものにしがみついていた姿を知るところに、本来の道理に適ったあり方が恵まれるのは、時代を超えているのでしょう。
　その「葛藤」に気づかせてくれるのは、私が称えるお念仏でありつつ、それを如来さまの気づけよ、目覚めよ、身の程知れよという呼び声と聞かせて頂く生活習慣だと思い当たりました。

合掌

万行寺第十八世住職　釋静芳（本多 静芳）

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。